公民館の図書室は　学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2021 年（令和3年）4 月 5 日
第 695 号

国立市中 1－15－1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国 立 市 公 民 館

図書室をご利用ください。

―市民の本棚として公民館活動の資料室として―

公民館図書室には約二万五千冊余りの蔵書があり、「市民の本棚」として利用していただけるよう運営しています。公民館図書室は一人でも気軽に利用できる場所です。新聞の閲覧や、本・雑誌を借りることが出来ます。公民館では市民の皆さんが参加できる講座や催し物を行っており、そのテーマ・内容に関連した本を優先してそろえています。このように、公民館主催の講座や市民の学びと密接に結びついて運営していることが、公民館図書室独自の特徴です。

■図書室のつどい

毎月一回開催しています。文学・社会科学・自然科学・時事問題等、さまざまなテーマの本をとりあげ、著者に来ていただきお話を聞く催しです。

著者の話を直接聞くことでそのテーマ・課題への関心や理解がより一層深まります。

■図書室月報の発行

ご覧になっているこの「図書室月報」は、公民館図書室の利用者や講座参加者に原稿を寄せていただき、掲載しています。一ページ目は「図書室のつどい」等の講座参加者の感想や、読んだ本の感想を載せています。最終ページの「私の本棚から」は、お一人に六回連続で、興味を持った本などについて、感想や紹介を書いてもらっています。

紙面を通しての交流や学び合いの場となるよう毎月発行しています。

■市民グループの発行物・ミニコミ収集

市内で活動するグループや団体が発行しているチラシ・冊子等のミニコミ誌を収集して、閲覧できるようにしています。市民活動を集積・記録し、共有するという公民館図書室の役割として行っています。

グループ活動で発行・出版したものがありましたら、ぜひ図書室に寄贈いただければと思います。

■くにたちブッククラブ

年間のテーマを設け、日本文学から八作品を選び、参加者の読みの発表と講師の講義ですすめる読書会です。

二〇二一年度は「人生、野を超え山超えて」というテーマで開催します。今号三ページ目に年間の予定を載せています。

公民館図書室の本や雑誌を借りたいときは？

くにたち電子図書館

国立市に在住・在勤・在学の方で、図書カードをお持ちの方は、パソコン・スマートフォン・タブレットなどから利用できます。

本や雑誌を借りるためには、
『**くにたち図書利用カード**』が必要になります。

◇国立市に在住・在勤・在学の方、国分寺、府中、立川、日野の市民の方は本を借りることができます。
◇くにたち図書館のカードをお持ちの方は、そのままお使いください。
◇カードをお持ちでない方は、新たに登録をする必要があります。
　住所が確認できる健康保険証、運転免許証などをお持ちください。
◇カードは５年ごとに更新が必要です。
◇詳しくはお問合せください。

ブッククラブから

くにたちブッククラブ文集ができました。

矢野　勝巳（文学講座連絡会編集委員会）

二〇二〇年度くにたちブッククラブの文集は、講座参加者の感想を中心にまとめられています。ここでは矢野 勝巳さんが書いてくださった「あとがき」の文章を抜粋して紹介します。

２０２０年度は、世界が未知のウイルスによるパンデミックに襲われた年として長く記憶されることでしょう。国立市公民館も一時休館を余儀なくされましたが、職員及び講師の皆様のご努力で、５月と６月の会を休会とせず延期して実施していただき、深く感謝いたします。

海外に行くのはもちろんのこと、国内においても長い距離の移動を制限せざるを得ないこのような状況の時に、地域の身近な公民館事業のかけがえのなさを改めて認識しました。

ところで、文学は、論理的な分析では抜け落ちてしまうけれども人間にとっては本質的なことを扱う分野だと思います。作者は、優れた作品ほど、計算して書くことはできません。

ですから、作品の感想に正解はなく、参加者ごとに異なる多種多様なものになります。参加者の皆さんの感想や講師の方の解説をお聞きした上で書く「図書室月報」や「文集」の原稿には、個人名で書いていますが、意識的あるいは無意識の中に皆さんの感想が反映されているような気がします。

また、選定された８つの小説作品は、参加者の皆さんが各々推薦した作品の中から選ばれたものです。このブッククラブで取り上げられなければ、永遠に手に取ることのないであろう作品もあります。

感覚的に苦手な場合もありますが、逆に、新鮮な出会いのある作品も多くあります。このような時は、自分の推薦した作品が選定されて再読する時以上に、読む喜びがあります。

この文集の感想文は、書き方も長さも様々ですし、一見、まとまりのないように見えます。しかし、このことこそ、自由で多様な「くたたちブッククラブ」の特色を表しているように思います。

文集をお読みになりたい方は公民館図書室までお越しください。

新着図書から

〈総記〉

背表紙の社会学　水無田気流（青土社）020

それでも僕たちは「濃厚接触」を続ける！　広瀬浩二郎（小さ子社）069

命を危険にさらして　マリーヌ・ジャックマン（創元社）070

〈歴史〉

ナチの妻たち　ジェイムズ・ワイリー（中央公論新社）234

ペルソナ　中野信子（講談社）289

探検家の地図　ピョートル・ウィルコウィエツキ（かんき出版）290

地名の政治地理学　田邉裕（古今書院）290

〈社会科学〉

命の経済　ジャック・アタリ（プレジデント社）304

緊急提言パンデミック　ユヴァル・ノア・ハラリ（河出書房新社）304

コーヒーを味わうように民主主義をつくりこむ　秋山訓子（現代書館）311

日本は「右傾化」したのか　小熊英二編（慶應義塾大学出版会）311

沖縄が問う平和的生存権　小林武（学習の友社）312

僕の大統領は黒人だった　上・下　タナハシ・コーツ（慶應義塾大学出版会）312

ジョン・ボルトン回顧録　ジョン・ボルトン（朝日新聞出版）312

芦部信喜　渡辺秀樹（岩波書店）323

スレブレニツァ・ジェノサイド　長有紀枝編（東信堂）329

変わろうとする組織変わりゆく働く女性たち　安藤史江編（晃洋書房）336

株式会社ウチらめっちゃ細かいんで　佐藤啓（あさ出版）367

女性の世界地図　ジョニー・シーガー（明石書店）367シ

スウェーデンにおける障害者の生活保障　清原舞（生活書院）369

ぼっちゃんが、あんちゃんになった　高橋利一（誠文堂新光社）369

〈くにたちブッククラブ〉

人生、野を越え山越えて

月に一度、小説の世界に浸ってみませんか。
この講座では、作品を読んで各自の「読み」を出し合い、参加者や講師のお話を聞いて「読み」を深めます。
今年度は、なかなか遠出ができない期間も、いまの自分とは少し違った世界を
登場人物と一緒に体験できるような作品がそろいました。どうぞご参加ください。

月日	作品	講師
5／13（木）	古川日出夫『ベルカ、吠えないのか？』（文春文庫）	紅野（こうの）謙介（日本大学・日本近代文学）
6／24（木）	柳美里『ＪＲ上野駅公園口』（河出文庫）	山岸　郁子（日本大学・日本近代文学）
7／8（木）	高橋弘希『指の骨』（新潮文庫）	佐藤　泉（青山学院大学・日本近代文学）
9／9（木）	川端康成『山の音』（新潮文庫）	金井（かない）景子（早稲田大学・日本近代文学）
10／14（木）	古井由吉『辻』（新潮文庫）	大野　亮司（亜細亜大学・日本近代文学）
※11月（木）	向田邦子『思い出トランプ』（新潮文庫）	小平（おだいら）麻衣子（慶應義塾大学・日本近代文学）
12／9（木）	中島らも『今夜すべてのバーで』（講談社文庫）	榎本　正樹（現代日本文学）
1／6（木）	松本清張『或る「小倉日記」伝』（角川文庫）	大木　志門（東海大学・日本近代文学）

※11月は市民文化祭の日にちが決定次第お知らせします。

とき　夜７時半～９時半
ところ　公民館　地下ホール　定員　30名
申込先　公民館　☎（572）5141

トコトン生きるための１５問　玉木幸則（解放出版社）369
子どもを連れて、逃げました。　西牟田靖（晶文社）369
マララが見た世界　マララ・ユスフザイ（潮出版社）369
子どもが作る弁当の日　城戸久枝（文藝春秋）374
学校弁護士　神内聡（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）374
みんなの民俗学　島村恭則（平凡社）380

〈自然科学〉
４７都道府県知っておきたい気象・気象災害がわかる事典　三隅良平（ベレ出版）451
世界の夢の動物園　ナターシャ・ムーザー（エクスナレッジ）480
スマホ脳　アンデシュ・ハンセン（新潮社）498

〈工業〉
身近なプラスチックがわかるあるものでまかなう生活　西岡真由美（技術評論社）578
井出留美（日経ＢＰ日本経済新聞出版本部）590

〈産業〉
東京脱出論　藻谷浩介（ブックマン社）601
農と食の戦後史　大野和興（緑風出版）612
「線」の思考　原武史（新潮社）686

〈芸術〉
古典で旅する茶の湯八〇〇年史　竹本千鶴（淡交社）791

〈文学〉
かなしき時は君を思へり　山下多恵子（未知谷）910イ
一篇の詩に出会った話　Ｐｉｐｐｏ（かもがわ出版）911
生きるコツ　姜尚中（毎日新聞出版）91カ
吉本隆明わが昭和史　吉本隆明（ビジネス社）91よ
きょうの肴なに食べよう？　クォンヨンソン（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）92ク
実は、内向的な人間です　ナムインスク（創元社）92ナ
本当の豊かさ　ジャン・ジオノ（彩流社）95ジ
同意　ヴァネッサ・スプリンゴラ（中央公論新社）95ス

図書室で読める雑誌

〈月刊誌〉
中央公論
文藝春秋
東京人
世界
婦人之友
母の友
教育
月刊公民館
月刊社会教育
社会教育
月刊福祉
きょうの健康
栄養と料理
芸術新潮
＆プレミアム
音楽の友
山と渓谷
本の雑誌
現代詩手帖
新潮
図書
ちくま
みすず
未来

〈週刊誌・週刊紙〉
ＡＥＲＡ
週刊文春
図書新聞
週刊読書人

〈その他〉
婦人公論（月２回刊）
キネマ旬報（月２回刊）
サライ（月２回刊）
ふぇみん（月３回刊）
多摩のあゆみ（季刊）
明日の友（隔月刊）
Ｃｈｉｏ ちいさい・おおきい・よわい・つよい（隔月刊）
くらしと教育をつなぐＷｅ（隔月刊）
暮しの手帖（隔月刊）

〈外国語新聞〉
東亜日報（ハングル）
人民日報（中国語）
ジャパン・タイムズ（英語）

〈外国語雑誌〉
新東亜（ハングル）
青年文摘（中国語）
読者（中国語）
タイム（英語）
ひらがなタイムズ（日本語と英語）

〈私の本棚から　第１回〉

ロアルド・ダール 著『マチルダはちいさな大天才』

上野 千晴

友達のなおちゃんとは、どちらが先に面白い本を見つけるかを競っていた。なおちゃんが見つけてきたこの本は、私の読書人生の基盤となるセンセーショナルな一冊であった。

本作は、イギリスの作家ロアルド・ダールの作品の一つ。著名な作品といえば、『チョコレート工場の秘密』。有名な映画の原作である。でも、私の中ではマチルダが一番。お話の世界に惹き込まれ、魅了され、何度も読み競った本はほかにない。物語の世界にワクワク感を覚えた初めての作品なのだ。クェンティン・ブレイクの挿絵とともに、子どもの心をとらえて離さないお話は、小学五年生の私の心をも容易くかっさらって行った。

マチルダは四歳の女の子。五つ年上の兄、中古車販売業の父、ビンゴが大好きで派手な出で立ちの母、ウォームウッド夫妻だ。それが彼女の家族。両親ときたら、頭の良いマチルダをよく喋るうるさい奴だと思っていた。この両親大っ嫌い！。特にミスター・ウォームウッド。嫌味な言葉に高圧的な態度。嫌な大人代表！って感じなのだ。

賢い彼女の才能を、見落とさなかった大人はちゃんといた。図書館のミセス・フェルプス。担任ミス・ハニー。二人の女性との出会いがマチルダの人生を大きく変える。ミセス・フェルプスとの出会いに凄くほっとして嬉しかったのを覚えている。嫌な大人ばかりじゃないって。やっと出てきた良い大人に安心して、マチルダを助けて！と思ったものだ。

と、気を緩めていると、この先に現れる強敵の存在に、子どもの心は打ちのめされるのだ。校長ミス・トランチブルの登場で。これでもかと、汚い言葉と表現を使い、ロアルド・ダールはマチルダをいじめる大人を描いている。でもそれが、子どもたちの心を煽る作戦に違いない。そんな言葉に負けずに打ち勝つ彼女の姿を、読む側の子どもたちは応援しているのだ。まるで自分がマチルダと同じ気持ちで、悪い大人に立ち向かっているような高揚感を抱かせる。それがこの作品の魅力。

ミス・ハニーは、マチルダを最も理解し、対等に話の出来る存在となっていく。豊かな言葉が飛び交う二人のやり取りは、先の罵詈雑言と対比して、ストーリーに緩急を感じさせる。これも作者の魔法だ。

子どもが出会う大人の一人になった今の私は、どんな大人に写っているのだろうか。出会いが、人生に影響を与えることは確か。マチルダがミス・ハニーと出会えたことは、読んでいる子どもたちに希望を与えたと思う。そして安心を。見ていてくれる大人がいる、信頼できる大人は必ずいる、そのことを作者は伝えたかったのではないだろうか。

（評論社）